

逆転移

三地域エントリー

地域間コンサルタント：Anna Ursula Dreher (ヨーロッパ),

Adrian Grinson (中南米), and Adrienne Harris (北米)

連携共同議長：Eva D. Papiasvili (北米)

I. 序論そして手引きとしての定義

逆転移は精神分析の中で最も変化し、また変化しつつある概念の一つだ。逆転移には歴史的、理論的、実証的、そして経験的に取り組む必要がある。今日では、この概念は極めて広範にわたる分析状況での分析家の患者に対する（意識的無意識的な）感覚や思考、態度を意味する。最も広い意味では、それは患者についての、あるいは患者に対する分析家の感覚や思考、態度の総体を表している。最も狭いと、逆転移は非常に特異でほとんど無意識的な患者の転移への—文字通り患者の転移に対する—反応を表している。精神分析における最も入り組んだ、複雑に発展しつつある概念の一つであるこの概念は、今日の一連の国際的な動向を超えた多くの意味を持つに至っているが、逆転移の経験は、有効性と危険性の両方の可能性を有していると一般に認められている。転移 - 逆転移マトリックスのなくてはならない一部として、逆転移概念は精神分析の不可欠で、もし多岐に広がる方向で概念化されるなら、相互作用的次元を表す。

今日のヨーロッパと北アメリカの精神分析の辞典（Auchincloss, 2012; Skelton, 2006）に基づいて推定し展開させて、臨床的な現象としての逆転移の経験は、精神分析状況にある多様な出所より生じるもので、患者と分析家の内側 *within* と間 *between* の様々に概念化された過程とメカニズムによって伝えられるものであり、その現象学には以下のものを含めることができる。

- 患者の素材に反応しての分析家の意識的な感覚あるいは考え。
- セッションの中か後で分析家が示されたことに対する真剣な自己分析と共に想起するあるいは（再）構成する無意識の感覚あるいは連想。このことは、分析状況の全体性に対する反応としての分析家の精神内界的経験はもちろん、患者の転移への分析家の反応、分析家自身の転移、あるいはやり取りの何らかの要素や特徴を含む。
- 分析家の自我理想と葛藤を生じるような無意識の感覚あるいは考えで、分析家の感受

性や自己 - 内省/自己 - 分析する機能を妨げ、患者の分析、あるいは次第に強まる分析家の逆 - 抵抗の高まりの分析を妨げる様々に概念化された盲点を引き起こす。

- 一時的な問題/現象というよりも分析家のある状態、したがって分析家の自我が今まさにそこにおいて知覚し、思考し、感じるような逆転移ポジション。そのような内的な状態/ポジション/態度が行為に転じないで「誘発された」と体験する程度に応じて、それは様々に概念化されてきた「投影同一化」そして/あるいは「役割応答性」を含むだろう。
- エナクトメント、もし解決されていない逆転移が行為として排出されるならば。そのような現象の有用性と必然性については幅広い議論がある。現代の多くの著者は、他の方法によってはアクセスすることのできない(蒼古的で十分には象徴化されていない)無意識的素材の現れを許容するものとしての逆転移エナクトメントという視点を推し進めている。もしそれらの素材が理解され解釈されるなら、分析的なペアが新たな意味を発見する機会を作るだろう。アクセスすることのできない無意識的素材が患者の(いかにかすであろうとも)行為により無意識的に喚起され/誘発され/吹き込まれると体験される程度に応じて、エナクトメントはさまざまに概念化された投影同一化や役割応答性を含み、さらには逆転移ポジションあるいは状態の段階的拡大となるだろう(エナクトメントの項目を見よ)。

現在の中南米の事典(Borenszejn, 2014)は、上に述べた臨床的概念の多様性を幅広い要約の中で叙述している。その幅は、被分析者に対する心理学的な反応として分析家の中に現れることがらすべてを含む逆転移から、被分析者の分析者との関係における幼児的で不合理で無意識的なことがらを表す用語としての逆転移にまで広がっている。

全般的に言えば今日では3つの大陸文化全てを越えて、逆転移と転移は不断の相互作用—転移は逆転移を誘発しその反対もある—にある「双子」のような概念とみなさなくてはならないという意見の一致がある。それらは分析的な関係の中心的な次元を描写する。転移は分析家との関係における患者の精神的な過程に焦点を当て、逆転移は患者との関係における分析家のそれに焦点を当てる。精神分析の歴史を通じて逆転移への臨床的な関心は一貫して強まっている。当初逆転移は、転移と同じく治療の妨げとみなされた。後には今日に至るまで、関わりあう二人の無意識に至る「王道」のようなものとして広く理解されつつある。

このエントリーでは、まずは精神分析理論の進展と概念的枠組みの展開の中での逆転移の多様な意味の発展を追い、エントリーのまとめでは逆転移の分類を試みる。全体を通じてこの概念の進展が世界的な特徴であることに注目する。

II. 概念の歴史と進展

II. A. Freud と「狭義」の逆転移

この用語は 1911 年の Freud から Carl Gustav Jung への、Jung の Sabina Spielrein との恋愛経験を扱った手紙の中で初めて現れた。「痛みを伴うものではありませんが、そのような経験は必要で避けることは難しいのです。それらの経験なしに、私たちは人生や私たちが扱いつつある事柄を本当には知ることができません・・・それらは私たちに必要な神経のずぶとさを発達させ、「逆転移」を抑えるよう助けます。なにしろ逆転移は私たちにとって恒久的な問題なのですから。それらは私たちに私たち自身の感情を最良の強みに置き換えることを教えます。それらは「姿を変えた祝福」なのです。」(Freud, 1909, p. 230-231)

この概念は、1910 年に『精神分析療法の今後の可能性』の中で初めて正式に公表された。そのなかで、Freud は分析家について「私たちは分析家の無意識的な感覚への患者の影響の結果として分析家に生じる「逆転移」に気づくようになってきた。加えて私たちは、分析家は彼自身の中にこの逆転移を認識し克服するだろうと主張したい気持ちになってもよいだろう・・・自分自身の葛藤と内的な抵抗の許しを超えて進める分析家などいない」と述べた (1910. p. 144-145)。この叙述の中で Freud が用いたドイツ語の「Gegenübertragung」が、López-Ballesteros(1923)によりまず最初にスペイン語で「transferencia reciproca」と、あるいは英語では「reciprocal transference」と訳されたことは注目に値する。

2 年後に『分析医に対する分析治療上の注意』の中で Freud (1912) は、患者との分析的な作業への準備として、そのような逆転移を認識し、取り組み、克服するための訓練分析を主張した。

さらに後に、彼は「私たちは、逆転移を抑制し続けることを通じて我が物にした患者に対する中立性をあきらめるべきではない」と付け加えた (Freud 1915, p. 164)。Freud は分析家の心を「道具 instrument」と考えたが、その道具は逆転移や分析家の未解決の葛藤と盲点によって分析の作業に課される制限により上首尾のうちに作動することを妨げられる。したがって逆転移は分析家の自由と患者を理解する能力への障害だとみなされた。まず逆転移は気づかれ、その後克服されなければならない。

しかし至る所で、矛盾あるいは葛藤の不可解でかすかな兆候の中で、概念の多様性 (Reisner, 2001) を予見し形作る彼の自身の理論をくつがえす努力に一致して、たくさんの手紙や理論的な見解の再評価において Freud は彼の弟子たちが自己認識と自己理解の一部に耐えることを学びつつあることにもまた気づいていた。逆転移についての私たちの知

識の深化はこの原則にぴったりと調和している。この文脈において、精神分析の始まりを告げたテキストである『夢解釈』(Freud, 1900)で最初に報告された夢が、卓越した逆転移の夢である 1895 年の「イルマの注射の夢」だということは注目に値する。

ちょうど『夢解釈』を書いていた頃である 1895-1899 年の自己分析の間の Freud の生活の Harold Blum (2008) と Carlo Bonomi (2015) による歴史的再構成は、Freud の Fliess への転移、および Freud と Fliess の共通の患者 Emma Eckstein (夢の中では「Irma」、後には最初の女性の精神分析の治療者) への Freud の逆転移の複雑さを明らかにしている。Blum と Bonomi は、この逆転移がどのように彼の理論の発展を(とりわけ、両性性から異性愛規範性へ、誘惑による外傷論から精神的発達、無意識的空想および精神内界的葛藤という精神分析的な概念化へ、という発展を)形作ったかを論証する。この文脈において逆転移概念は、「精神分析の誕生」からその発展全体を通じて、理論と実践、臨床的な作業と概念化の不断の交流を例証しわかりやすく説明する。

Freud はこの概念を導入したが一転移の場合とは異なり一逆転移を分析の作業の効果的なツールとして作り上げる歩みに明白には踏み出さなかった。Freud の明示的な初期の観点は逆転移の「狭義」の視点と呼ばれるようになった。彼の初期の信奉者の多くは、初期の精神分析の教科書、口頭発表や学会誌で明らかなように (Stern, 1917; Eisler, 1920; Stoltenhoff 1926; Fenichel, 1927, 1933; Hann-Kende, 1936)、この「狭義」の視点に従った。英語表記ではこの狭義の視点は「逆 - 転移 counter-transference」としばしばハイフンを用いて記載され、分析家の患者の転移に対する無意識的な(転移的な)反応を強調した。この視点から生まれた興味深い記述が Helene Deutsch (1926)によってなされた。彼女は「*相補的ポジション complementary position*」としての逆転移という考え方を導入したが、それは後に Heinrich Racker の独創的な寄与の中で練り上げられた。

この狭義の視点の行く末を見ると、とりわけ、例えば Annie Reich (Reich, 1951)のようなフロイト派の技法の標準的な支持者のその他の仕事の中に、さらには、幾分異なる視点から、Jacques Lacan (1966/1977)の仕事の中にも、そのような狭義の視点が引き続き保たれていることを見ることができる。Reich は「逆 - 転移」を分析家の分析的な共感への転移性の障害として強調するのだが、Lacan は分析家と患者の非対称的な関係の中で分析家の知識と「力 power」の影響を改変し広げているにもかかわらず、逆転移をもっぱら思い違い、神経症、および分析家の全般的な機能の破れ目の貯蔵庫であり、解釈の作業には必要がないものとみなしている。患者の欲望よりも状況の間主体的な力動全体を理解するという分析家の欲望の優先を考慮に入れることが必要だという逆転移に関するラカン派の概念は一精神分析において「抵抗」はまず、そしてまっさきに分析家の抵抗だという彼の有名な発言により繰り返されているとおりに一特にヨーロッパと北アメリカのフランス学派の間主体的な方向性の中で今日でもなお鳴り響いている (Furlong, 2014)。

とはいえ Freud は、分析家は患者の無意識のなにかを分かるか気づくことができる治療的なツールとしての逆転移という視点を予見しているように思われるいくつかの見解を記した。彼は「分析家は受話器が送話器に順応するように彼自身を患者に順応させなくてはならない。電氣的振幅を受話器が音波に轉換して戻すように、・・・医師の無意識は、彼に伝達された無意識の派生物から、患者の自由連想を決定づけた無意識を再現することができるのである」と記した(1912, p. 115-116)。さらに無意識的過程についての見解を推敲する中で、Freud(1915)は分析状況における患者の無意識の力動のみならず分析家のそれにも特別な注意を向けた。彼は、患者と分析家の意識的および無意識的な心的過程とは深く絡み合っているという事実をはっきりと知っていた。1951年に Annie Reich は、このことに関する特別な側面について、分析家にとって、患者は「過去の感情と願望が投影される過去の対象」を表すようになる(1951, p. 26)と力説した。転移はどこにでも姿を現すのだから分析家たちも患者たちに、患者たちがまさに分析家たちに抱くであろう転移を持つと思われる。(その感覚は患者にとっても分析家にとっても大部分が無意識であるだろう。)

このことは『終わりある分析と終わりなき分析』(1937b)において示された。Freud はその中で、患者の抑圧と接触し続けることで、さもなくば抑制されたままであったはずの欲動の要求が分析家の中にいかに喚起されるものなのかということ、そしてこのことがやがては「危機」という結果にさえなるかもしれないのであって、それ故に分析家には定期的な自己分析の必要性が生じるものであることを力説した(1937b, p. 249)。それまでの言明と比べると、このことは明らかに患者 - 分析家関係の異なる側面、すなわち患者の無意識への反応はプロセスを、そして分析家の中に変化すら引き起こすかもしれないということを提起している。

初期には、逆転移は主に分析家の患者への転移は分析家が冷静に患者を評価することを妨げ、分析家の客観性、中立性と臨床的な有効性を妨げるリスクとして概念化された。しかし、彼の後の眺望においては、それまではこの主題についての自身の考えの「その他」の傾向としてほめかされていたにすぎないものが結実し、逆転移は単なる分析家の精神内界的 *intrapsychic* な力動という問題というだけではなく、精神相互的 *interpsychic* な過程の結果であるとされるに至り、後の発展を明確に予示する視点となっている。

II. B. より広い概念の基本的な輪郭

(ハンガリー、英国、そしてアルゼンチンにおける 1920 年代後半—1950 年代前半)

逆転移が治療を妨害するものから道具になるというパラダイムシフトは 1920 年代後半に Sandor Ferenczi (1927, 1928, 1932)がトラウマをもつ患者に対して、分析家の立場をむしろ参与する観察者として考え、分析的な中立性（そして禁欲性）という原則に挑戦したことから生じ始めた。Ferenczi の教え子でもあり、翻訳者でもあった Michael Balint (1935,

1950; Balint and Balint 1939)はその後分析治療の目的の「古典的な」記述と「ロマン的な」記述を区別した。すなわち「古典的な」著者たち—フロイト に始まる—は洞察の発展を強調し、自我を強めるよう心的構造が変化することと関連して分析の目的を考えていた一方で、「ロマン的な」著者たち—初期の対象関係論者である Ferenczi そして「新規蒔き直し」という概念を提示した Balint 自身—は力動的または情緒的要素に焦点をおいた(Balint 1935, p.190)。Ferenczi の初期の論文、「取り入れと転移」(1909)は分析家の逆転移を被分析者の転移と相互作用するための道具とみなすことでこの発展の前兆となっている。全ての類の情緒的反応が、外傷体験のある患者に対して感じる愛情ですら、心的変化に対する原動力になりうると Ferenczi は主張した。彼の「参与する観察者」という分析的スタンスと「柔軟性のある技法」(Ferenczi 1928)は、逆転移を共 - 構築され共 - 創造されるものとして考え、そして分析家の主観的経験を分析的治療の中でさまざまな重要性をもって参与しているものとして考えるようなその後の考え方の、歴史的な先駆といえよう。Ferenczi の逆転移についての観点の提示そして柔軟性のある技法という彼の臨床は、とりわけ外傷体験をもつ患者との分析的作業において、非常に創造的で一貫して影響力を持っていると認知されている (Papiasvili 2014)のだが、Balint (1966)が好意的だが厳密に検討したように、当初から論争を呼び幾分過剰だとみなされた。この観点のより革新的な部分は、後に、*性愛的な逆転移*[分析家がアナリザンドに性的関心を発展させること]でさえも患者に心的変化を引き起こすことができると主張した北米の分析家 Harold Searles(1959, 1979)により表面化した。

逆転移が有効な治療的手段になるという考えは 1950 年に Heimann により明示された。Heimann は患者に対する分析家の情緒にまず焦点づけた。Heimann の逆転移についての基本的な想定は「分析家の無意識が患者の無意識を理解するのであり、この深いレベルでのラポールは、分析家が患者への反応において、すなわち「逆転移」において気付く感情という形で表面化する」 (Heimann 1950, p. 82)というものであった。分析家は患者への自らの情緒的応答—逆転移—を隠された意味を理解するための鍵として使用しなくてはならない。つまり、分析家は「引き起こされる感情を...分析的課題に利用するために、(患者がするように) 排出する代わりに耐える」ことができなくてはならない(1950, p. 81-82)。このように、分析家の逆転移は、Heimann によると、*患者の無意識の中へと精査する道具*であり、それは分析的作業の中で最も重要なものである。しかしながら、それをどのような条件で分析的に利用するかということについては、それとして認識するが体現しないというものだった。

Heimann(1960, 1982)の定式化は、広く精神分析文化の中で、逆転移についての著作物に影響力を持ち啓蒙するものとなった。これが逆転移の「*二者関係の観点*」と呼ばれるようになったもので、分析家から被分析者に早期の無意識状態の遺残物を移すのに加え、分析家と被分析者の間の相互作用によって創造されるものの一部という認識を表す。このより広い

観点では、「逆転移」という用語はセラピストの無意識的衝動や不安、内的対象、そして過去の人間関係から派生したものだけでなく、セラピストが患者に対して持つ全ての情緒、空想、そして全ての種類の経験を示す。

逆転移についてのこの広い観点は、同時期に英国の Donald Winnicott (1949)そしてアルゼンチンの Heinrich Racker(1948, 1953, 1957, 1968)といった他の著名な思想家によっても発展した。英国と中南米におけるこれらの並行する発展は、Horacio Etchegoyen(1986)により言及され、彼は Heimann と Racker の仕事は相違点と同時に顕著な類似点があり、それぞれ独立して進んだと強調した。

英国では、Heimann が新しく提示した逆転移についての視点はクライン派により「投影同一化」の概念が導入されたことを巡っての大論争の背景で激しく主張された(Klein 1946, Meltzer 1973)。Edoardo Weiss (1925)と Marjorie Brierley (1944)により「投影同一化」という用語は以前より使用されていたが、その概念を定式したこと、そして対象への侵入する万能的な空想に対応させたのは、Melanie Klein の貢献とされている。Klein 自身は臨床的に逆転移を使用することに明らかに興味はなかったが(Spillius, 1994)、彼女の投影同一化の概念は広い意味での逆転移の概念に密接に関連する。投影同一化(別項目である投影同一化を参照のこと)は患者が分析家に自分の感情(後にこの概念が拡張される前は、ほとんど「悪く」破壊的なものを元来強調するものだった)を投影することを意味する。理論的には、逆転移の範疇では、分析家の無意識的情緒と空想は被分析者によって引き起こされているとみなされる。

アルゼンチンの Racker (1948, 1953, 1957)は投影同一化の概念を、特に逆転移の臨床的文脈に導入した。逆転移についての Racker の概念化には Freud と Klein 両方の影響が認識できるが、de Bernardi(2000)の中南米の伝統における逆転移のレビューによると、無意識的幻想の考えと投影と取り入れのメカニズムを顕著に利用していることから、Racker は総じて Freud 派よりも Klein 派に位置づけられる。

Racker の考えでは、逆転移は患者の投影同一化に対する分析家自身の反応とみなされる。患者の投影による情緒的反応において、分析家は患者の内的対象に同一化する(補足的逆転移)か、または患者の自己に同一化する(融和的逆転移)。

「補足的ポジション」としての Deutsch の逆転移についての考えを広げて (Deutsch 1926)、Racker は被分析者の内面と同一化する分析家の傾向について言及している。これは構造的に概念化すると、分析家の人格のそれぞれの内的審級が被分析者の人格の中の対応する部分に同一化するということである。つまり一方の自我は他方の自我に、イドはイドに、というようにである。Racker はこれらの同一化を「融和的」と呼び、分析家が被分析者の内的対象と同一化する「補足的」と呼ぶものと区別した。彼の体系の中では、融和的と補足的同一化は相補的に釣り合っている。つまり分析家が融和的な同一化を理解し損なった度合い

と同じくらい、補足的な同一化が大きくなる。

融和的同一化は共感という性質を持つと説明され、昇華された陽性の同一化に源がある。一方では主体としての分析家がいて知識の対象としての被分析者がいる。対象関係はある意味消え、そこには主体の一部と対象の一部の間のおおまかな同一化が存在する。それは「融和的」と呼べるような組み合わせである。他方で、分析家の側の真の転移といった性質を持つ対象関係が存在する。そのさい被分析者は分析家のなんらかの内的（蒼古的）な対象の代わりとなり、それと同時に分析家は早期の体験を再生する。この組み合わせが「補足的」と呼ばれる。このようにして、逆転移反応を通じて分析家は患者の内的に主要な役が自分に投影されることを気づくことができる。

Heimann はいくつかの点で反対の立場をとる。それは、逆転移は患者に反応して分析家に感情を喚起するというものである。このような感情は分析家の感情であり、患者の分析家への投影同一化の結果ではない。そしてそれらを心に留め理解することは患者の無意識へ接近する構成要素となる。Heimann の発展させたものでは、逆転移は分析家に「意識と無意識で感知していることに隔たりが生じている」可能性を伝える無意識の「認識の道具」であり「分析家の仕事に極めて重要な道具...」である。そのような違いは帰るところ「患者の無意識的取り入れ、そして患者との無意識的同一化」 となる(Heimann 1977, p. 319)。

Berlin から亡命したあと Heimann は最初に Klein 派と関係をもったが、彼女は逆転移を二者心理学的視点からみるグループに含められることが多い。彼女は自身が Klein から独立し始め Ferenczi および Balint の世界と再び結びつくようになったのを「逆転移について」という論考からだとしている。その論考では、分析家の情緒的応答の豊かな働きに集中的に焦点づけることと情緒的表出についての注意をバランスよく混ぜることを提示している。彼女は分析的逆転移を患者の一種の創造物であり、分析家に役に立つものとみなしていたようだ。しかしながら、彼女の臨床のヴィネットでは逆転移を「手がかり」とも「間違った手がかり」ともとれる自身の感覚を含めている。

逆転移という概念がますます重視されることに纏わる論争において、Winnicott の『逆転移のなかの憎しみ』は重要で独立した位置を呈している。1949 年に出版されたこの論文は Heimann が詳述した内容を予示するもので、とりわけ Winnicott が逆転移の一面として相互的で欠かせない攻撃性の役割を概念化したことで、逆転移についての複数の考えが出現する中、彼を欠くことのできない存在にした。Winnicott の二本の論文、『情緒発達との関連でみた攻撃性』（1950）と『逆転移のなかの憎しみ』（1949）は共に分析家の攻撃性と憎しみの必然性と臨床的な有用性を明らかにしている。Winnicott によると、憎しみは愛と母親の原初的没頭に反対するものではなく、それと対になっている。憎しみは境界を設定し、分離において、そして幻想と現実をときほぐす被分析者の能力において助けとなり、万能感による危険な経験を減らす。このようにして、セッションの時間を終えることに含まれてい

る憎しみも含めて、分析家の憎しみの側面は被分析者の変化に欠かせない要素となる。

Winnicott は (1) 抑圧の下にあっておそらく分析家による自己分析がもっと必要であるような逆転移感情(これらは分析家個人に特有の同一化と傾向である)と (2) 「真に客観的な逆 - 転移、...分析家の愛と憎しみが患者の実際の性格と行動への反応で、客観的な観察に基づいているもの」とを区別する(1949, p. 69-70)。「真の客観的な逆転移」は患者に対する分析家の感情を指すもので、それらは分析家自身の感情であり、そして—Heimann が後に見出すように—分析家の中に患者が投影する結果によるものではない。これらの感情は、従って患者の振る舞いに対する反応なのである。つまり患者の「客観的」なあり方への個人的な反応である。Winnicott によると、分析が進むためには、分析家のこれらの感情は—分析家に自身の感情であると認識されることによって、そして/あるいは解釈を通じて—患者の処理にまかされることも時には必要だ。

Heimann の観点のように、この考え方は古典的な Klein 派の見解である「投影同一化」の概念、すなわち患者/分析家関係の全体に影響を与える偏在的なメカニズムと考えられているものからは異なっている。Heimann と Winnicott の仕事の影響は第 3 のグループ、英国におけるいわゆる「独立学派」(第一は現代 Freud 派、第二は Klein 派)に長く影を落とした。この影は、憎しみと遮られた生命性という転移の形の深みを探索した Little (1981)から、否認されている分析家の面を伝えるものとして逆転移への注意深い調律性を促進した Bollas (1983)にまで広がるものであった。

総体として、英国においては、逆転移概念の更なる発展には分岐があった。一つ目の概念化、すなわち Klein による投影同一化と「Klein 派」で強調されたことに由来するものは、それ自体が患者—分析家が関係をもつ方法の理解への大きな一歩であった。二つ目の概念化、すなわち早期「独立学派の伝統」(Winnicott, Heimann)でのいわゆる逆転移は、分析家からきたものは分析家のもので、患者からの投影に分析家が反応しているとは自動的にならないと主張する。逆転移概念のこの違いは、治療における技法の用い方、そして患者のコミュニケーションで分析家がどのように考えて作業するかに関連した影響と結果をもたらす。

Racker から始まるアルゼンチン学派で並行してみられた発展は、逆転移の文脈内において独自の投影同一化の使用を展開するようになり、Klein 派の考えと近いものであった。

II. C. 概念の国際的な広がり—拡大の更なる輪郭

(20 世紀後半のヨーロッパ、中南米、そして北アメリカ)

1950 年代半ば以降から、「精神分析の視野の拡大」と共に、逆転移の広義の視点が優勢な考え方となり、それはますます有益な道具であるとみられるようになった。この 50 年で、

ほとんどの精神分析家たちが逆転移を障害としてのみではなく、そのかわりに被分析者への洞察の源であると同時に、被分析者との関係において自身の心的機能の洞察の源であるとみるようになってきた。ここで、それは時々「個人的な逆転移」または「診断的逆転移」と呼ばれている(Casement 1987)。この視点では、逆転移は二者が共に創造するものとしてみられるようになっており、そして転移と逆転移は単一の力動的過程の二つの終着点としてみなされている。逆転移のこのような視点により、この現象とエナクトメントとは密接に関連し始めたのだが、エナクトメントを境界侵犯、転移と逆転移の「現実化」への最初の一歩とみなす者もいた。

これら全ての世界的な発展において、「投影同一化」と「逆転移」の関係の概念化は重要な役割をもつ。Winnicott や他の独立学派の論者に加えて Heimann および Racker の考えは、分析家のもの想いおよび分析的対象/空間/設定/フィールドを多様に概念化された三者関係の構造と交流にする過程に焦点をあてた Grinberg (1956), Bion(1959) , Ogden (1994a) そして他大勢 によって発展し、拡大した (Baranger 1961/2008, Bleger 1967, Green 1974) 。これは患者と分析家の新しい創造物、Ogden(1994b)の用語でいう「第3主体」である。

アルゼンチンでは、メタサイコロジーの議論と(劇化とエナクトメントも含めた)逆転移性の投影-取り入れのへ参加という主題についての臨床的理論の分野での顕著な発展が、Leon Grinberg (1956)の投影逆-同一視概念によりさらに豊かになった。

Racker と Heimann はそれぞれ異なって概念化したのではあるが、それでも彼らにとって逆転移の文脈において投影同一化の機序を用いることは、患者の特定の内的対象あるいは自己部分に対する分析家の同一化の反応であった。しかし Grinberg は投影—取り入れのやり取りという蒼古的なコミュニケーションの側面に焦点を当てたのだが、それは後に Bion が取り上げた方向性であった。Grinberg の当初の提案では、投影逆同一化は分析的カップルがコミュニケーションにおいて「短絡路」を採用するというものだった。彼が仮定したのは、患者は自身のいくつかの側面を、分析家が実際にそして具象的に自分のものとして同化してしまうほどの投影的な暴力性を用いて受動的な受取手としての分析家の心に「置く」ということだった(1956, p. 508)。行動化との関連において自身の概念に言及して、Grinberg (1968)は次のように書く。「患者の病理的な投影同一化の影響に屈服した分析家は、投影された側面(患者の内的対象または自己の部分)を実際に獲得したかのように反応するかもしれない。分析家は受動的に、患者が無意識ではあるが能動的に文字通り彼に「強制」する役割を演じるように「引き込まれる」と感じる。私はこの特定の種類の逆転移反応を「投影逆同一化」と呼んできた」(p. 172;強調部分は執筆者による追加)。

分析家の情緒的な反応が、被分析者の中にある同様の内的対象と同一化した分析家自身の不安や葛藤に基づくものであるとする Racker の補足的逆転移と比較して、Grinberg は

分析家の反応を自身の葛藤から比較的独立したものとして概念化した。**Grinberg** の見解の長所は、分析家自身の無意識は本来関与していないことを強調したことであり、したがって分析家の内省はそのような投影逆同一化の根本に直ちにはアクセスするには十分でないことを強調したことだ。**Grinberg** が強調したのは、分析家が患者の心の蒼古的部分への洞察を探る中間地点として、後に知られるようになったそれ以上分解することのできない逆転移の「微小な行動化」である。そのような地点は、もし分析家が転移された対象の質の全貌を知りたいならば避けられない(**Grinberg 1982**)。

Grinberg (1956)の貢献は被分析者の無意識的な意図が、もはや主体内での空想(**Klein 1946**)としてではなく、二つの心の相互作用過程として概念化されるものとなった投影同一化を通して、分析家の心に影響を生じることをみたことだ。三年後に **Bion (1959)**は投影同一化のこのコミュニケーションの部分にはっきりと焦点を当てた。

投影逆同一化についての革新的な考えで、**Grinberg** は分析家の逆転移を再概念化する新しいメタサイコロジーの道具を同定した。彼の投影逆同一化は、患者によって開始される転移 - 逆転移の劇化によってでしか表現され得ない、捉え所がなく、言語化できないメッセージとしての投影同一化のコミュニケーション的部分を強調する。臨床的文脈ではこの転移 - 逆転移の劇化は、エナクトメントという迂回路を経て患者の心の最も蒼古的なレベルを聴くという、その後何年も後に発展した考えを予見していた(**Jacobs 1986; Godfrind-Haber&Haber 2002; Mancina 2006; Sapisochin 2013; Cassorla 2013**)。

1950年代後半から、**Bion (1959)**と **Rosenfeld (1962)**はこの概念を、投影同一化は被分析者からの無意識的コミュニケーションであるという考えに発展させた。**Bion(1959)**は、治療的相互作用と、苦しんでいる子供が自分自身の苦痛を「コンテイン」し適切に反応してくれる母親に投影する方法との間に類似点を見出した。分析家は(母親)同様の(コンテイング/「アルファ」)機能を持つ。つまり患者の投影を「もの思い」の状態において「コンテインし」、それらを「消化し」そして適切な解釈で応答する。このようにして、逆転移はそれを通じて分析家が患者の無意識的世界に接近できる道具としてだけではなく、患者が耐えられない経験を処理する手段としてみなされるようになった。つまりそれは探索のための道具だけではなく治療手段なのだ。**Bion**による分析家のコンテイメントおよびアルファ機能の考えの発展によって、被分析者の無意識と前意識過程が、分析家の心、情緒そして身体自我にさえも注ぎ込むものであることが鋭敏に理解されるようになった。(別項目であるコンテインメント: コンテナ/コンテインドを参照のこと)

この更なる発展において、投影同一化の概念は **Klein** 派、ビオニアン、ネオビオニアン理論、そして多くの間主体的、そして対人関係論的な考えにおいて重要な役割を維持し続けている。

原始的な空想と防衛の理論から蒼古的なコミュニケーションと思考という方向に逆転移

の概念が広がるにつれ、関係の複雑さ、そして投影同一化と分析家自身の逆転移の区別が重要となった(Grotstein 1994)。Bion、Rosenfeld、そして後に彼らのあとをついだ Mawson (2010)の仕事は、転移—逆転移のやり取りのコミュニケーション的側面をみるためには、誘発された情緒状態について分析家が徹底的に作業し、転移—逆転移のやり取りにおいて相互的そして創造的に意味を構築するという複雑な過程を経なければならないということを示している。分析家自身の逆転移を通じて、患者が格闘し伝達しようとしている情緒状態がどのようなものか、そのような投影は分析家に明らかにしてくれるだろう。Alvarez (1992)の仕事では、この観点は全ての分析過程を共—構築されたものとみる視点に一層広がっている。

間主体的過程が分析家、被分析者そして治療に及ぼす力についての豊かな理解は Klein に始まり Bion(1959)、Rosenfeld(1962, 1969, 1987) を通じた英国クライン派の思考の発展と、Racker (1957, 1968)と Grinberg (1956, 1968)のアルゼンチン学派に深く恩恵を受けている。この観点の様々な展開が英国の Segal, (1983), Joseph (1985), Spillius, (1994) そして O'Shaughnessy (1990), Steiner (1994), Feldman (1993)と Britton (2004; Segal & Britton 1981) の仕事の中に、そして Grotstein (1994), Mitrani (1997, 2001) その他の米国の分析家たちの仕事に続いた。

その間ずっと Ferenczi の逆転移についての初期の論文は直接的あるいは間接的に影響を持ち続けていた。逆転移に関する Ferenczi 的な考えの中心人物の一人、「基底欠損」(Balint 1979)概念の提案者である Michael Balint も投影と取り入れの議論への重要な貢献者であった。Ferenczi の革新的な考えは Michael そして Alice Balint によりロンドンにもたらされ、そして Klein 派といわゆる独立学派両方に影響を与えた。Ferenczi と Balint の考えは Racker (1957)を通じて中南米に到達した。Racker は Ferenczi(1927, 1932)の補足的同一化(患者の内的な攻撃的対象との)の概念に含まれる攻撃者への同一化の概念を利用し、そして階層的な訓練組織における逆転移に関する Balint の視点をさらに発展させた。Ferenczi と Balint の初期の同様の概念のいくつかが Clara Thompson (Green 1964)を通じてアメリカでの Sullivan の対人関係学派に届いた。この学派では分析的交流の共—構築的性質がより一層強調された(しかしながら Ferenczi、 Klein そして Racker にとって欠くことのできない退行が抜け去ってしまった)。

この文脈において、そしてその後続いたすべての発展の文脈においても同様に、転移と逆転移における共—構築、または共—発展を理解することが分析家に課せられた責任と要求を減じることはならないと強調しておくのは重要だ。逆転移の作業は意識と無意識のレベルで続き、そして逆転移を理解する作業はそのいくつかの側面が生じたセッションの時間を超えて広がる。

逆転移とは違い、投影同一化の機序は精神分析で普遍的に受け入れられてきたわけでは

ない。

自我心理学者と葛藤論者たちは、患者が分析家にある種の経験そして/または行動での反応を誘発する逆転移の側面を認識しつつも、分析家が患者の無意識的空想を「体現している」ことを強調して「転移の現実化」と「役割応答性」について話すことを好み、これらの用語の方が彼らの経験により近いものという姿勢を維持した (Sandler 1976)。

英国では Sandler (1976) はもう一つの理論的オリエンテーションである英国「現代 Freud 派」から—彼の「役割応答性」の概念によって—より具体化したものを提唱した。彼はどのように患者が彼の内的対象関係を—相互作用で起きる行動の中で—現実化しようとするか、現実には引き起こそうとするかを描写する。主体の一つの役割と他の内的対象のもう一つの役割を巻き込んだこの精神内界での相互作用は、分析家に特定の反応を引き起こすだろう。時に分析家はある特定の振る舞う衝動に気づくかもしれないが、たいていは後になってはじめて自分がこの患者と特定のやり方で既に振る舞い始めていたことに気づく（ここで「エナクトメント」という概念の議論—逆転移と区別して—が特に関連している）。Sandler によると分析家の逆転移反応は妥協なのだ。つまりそれらは患者の無意識的期待と願望のみならず、患者がしばしば無意識的に気づいており利用している分析家自身の傾向と共鳴している。分析家がそのような役割応答に気付いていることは患者において優勢な転移的葛藤の重要な手がかりになり得る。

それに対して、自我心理学/構造論に起源をもつ、いわゆる 1950 年代そして 1960 年代の北米の精神分析の主流は一者モデルのままであり、狭義の逆転移を支持していた。古典的な概念化では逆転移は分析家の心の「中」、感情のスペクトラムの中、抵抗、内的葛藤、盲点、患者の意識的および無意識的態度、患者の転移に対する反応、そして患者への転移の中に位置付けられていた。しかしながら、北米で影響をもっていた Anna Freud によりなされた子供とその養育者を巻き込む高度に発展した臨床的状況での子供の分析作業、Chestnut Lodge (Fromm-Reichmann, 1939)での精神病患者、そして Menninger Clinic (Menninger, 1954)での外傷患者とボーダーラインの患者との分析作業は、精神内界の構造の発達と形成に環境要因と対象関係が甚大な影響を及ぼすことを証明していた。このような臨床経験は分析家/被分析者状況における転移—逆転移の相互作用的フィールドの重要性を強調したのだが (Moscowitz, 2014)、その体系的な理論的統合がなされたのは Loewald の仕事の後であった。

Loewald は 1960 年代からそれ以降活躍した、変革者であった。元々 Heidegger (1962)の現象学の方向性に強く影響を受けている Loewald は、Winnicott (1947, 1950, 1972), Erikson (1954), Kohut (1977), Mitchell (1993, 1997), Aron (1996), Hoffman (1998), そして Bromberg (1998)と並んで、欲動論と対象関係論の「オープン・システム」版の提唱者としてみなすことができるかもしれない。彼の発達モデルでは、子供の自我は身体と心の母親

乳幼児の相互の関わり合いの核から生じる。そこでは母親の心は、統合と崩壊を繰り返しながら螺旋状に発達しつつ未分化な幼児の状態と相互作用し、更なる統合に向かっていく。この発達モデルは、個人に焦点を当てている時でさえもすべての経験が間主体的な相互作用から生じるという意味で転移と逆転移と密接な関係がある(Loewald 1960)。分析家の反応が患者の無意識からの強い圧力下にあるような子供の分析と精神病圏そしてボーダーラインの患者との分析から生じたこの発見の重要性を認めて、Loewald (1971)は転移と逆転移は別々に見ることはできず、分析家と患者はともに転移—逆転移反応を提示すると更に主張する。それらは分析的過程の普通にあるなくてはならないものなのだ。

Loewald の洞察は著しく多様化した北米の精神分析的文化的文化においてだけでなく、世界中で逆転移の議論の豊かなひな型となった。この時点以降、逆転移は患者と分析家が絡み合った分析的関係において避けられない側面であるとみなされた—これは今日の精神分析で優勢な考え方の一つである。

この視点はフランスにおけるフランス間主体的学派の考え、ベルギーおよび北米のフランス語を話す分析的コミュニティのいくつかの要素と類似しているところがある。「第3のモデル」と時に呼ばれているが、この視点は人間の発達において「二者心理」が欲動、防衛、そして心的内界の空想の「一者」的な心的自律性に先ずくと仮定する。つまり人間の人生における最初の段階で、乳児の心は無意識、前意識、意識システムの間の内的な局所論的区別や、イド、自我、超自我（一者心理）という構造化がなされる前に、養育環境（二者心理）の文脈で考慮されるべきだということである。「主体化」（このようにして内的に区別され構造化された主体になること）の過程を通して、「現実の（潜在的に外傷を与える）他者」(Lacan 1966/1977)との親密なつながりが最大となる。Laplanche (1993, 1999)はLacanのいう「外傷的な現実（他者）」—養育者—を間主観的領域に持ち込んだ。彼は乳幼児の身体と近接することで引き起こされる（大人の養育者の）無意識的セクシュアリティが謎めいたメッセージという形で乳幼児との親密な交流を「汚染する」ことを強調した。他の分析家達は子供/患者が「私を構成し」(Aulagnier 1975/2001, p. 97)、そして親/分析家が「考えを形成することに必要な」(Green 1975, p. 14)象徴化と表象化を促進しながら適切な距離にいる能力を通じて、「表象する活動」そして「情緒に名前をつけることにおける事後性」に焦点を当てることで、この発達の概念を臨床での交流と逆転移に直接応用できる領域にまで広げた。「共有され伝達される情緒」(Parat 1995)そして脱中心化された臨床的傾聴の「逆転移ポジション」(Faimberg 1993)にあるように、臨床的には、このことは、患者と分析家との間の言葉と行為を通じた無意識的交流と情緒の伝達のすべての形を注意深く「聴くこと」に言い換えることができる。

III. 相互的な国際的影響と概念の現代的な使用

Ⅲ.A. 現代フロイト派と対象関係論

北米の現代自我心理学および葛藤理論の流れにおいて、Arlow(1997)と Abend(1986)がセッション中の分析家の内的状態の細かな点やプロセスに焦点を当て、それに引き続き、Lasky(2002)は共感と分析的道具および本来の逆転移とを区別している。Blum(1991)は分析プロセスの双方向の転移 - 逆転移領域における情動的なコミュニケーションの複雑さおよび精神内界の葛藤パラダイム (Ellman, Grand, Silvan & Ellman 1998) の文脈から認知や経験、コミュニケーションや情動調節に特に困難を抱える患者の分析における特有の問題に焦点を当てた。

Kernberg(1983)は軽症の境界パーソナリティ患者の性格分析について記し、慢性的な逆転移と急性の逆転移とを区別している。Heimann(1960)の影響を認めながら、「・・・慢性的な行き詰まりは慢性的な逆転移的歪曲（急性の逆転移の発展よりも目立ちたくないものより広範にわたっている）とそうでなければ診断されなかったであろう微妙であるが強力な転移的アクティングアウトの両方を診断するのに非常に重要であるかもしれない。この点において、分析家の情緒的体験のすべてを考慮することは、ファーストラインのアプローチである直接的な転移の探求が不十分であるときの「セカンドライン」のアプローチである。」と彼は記している。(265、266 ページ、強調追加) 全体的には、Kernberg (1965、1975) の逆転移に関する考えはとりわけ境界例患者との作業においてその重要性を増し続けている。1965年に分析家に生じるあらゆる情緒的な反応を含むといった「逆転移」概念を拡大させることへの危険について彼は警告する一方で、1975年には逆転移を解釈する建設的な分析的ワークを認め、強調した。特に境界例患者とのワークにおいて、患者の非常に原始的な対象関係の投影による強烈な内的反応に分析家は対処し、管理しなければならない。彼の最近の転移に焦点をあてた精神療法 (Transference Focused Psychotherapy TFP) において、境界例患者の転移反応に全体的には焦点付けしながらも分析家の逆転移を内的にモニタリングするパラダイムを概説している。このモデルにおいて、分析家は第3のポジションから対話中の両者の相互作用について解釈的にコメントする。(Kernberg 2015)

対象関係論と対人関係論の間の創造的な人物である Mitchell (1993,1997) は、逆転移感情は心的ムーブメントのための原動力であるという説得力のある理解を伝えている。彼のヴィネットはどうしようもない絶望の瞬間にある分析的なペアをしばしば描写している。絶望という経験なしには、行き詰まりに至るプロセスを理解するために必要な仕事に分析家が駆り立てられることはないだろうと Mitchell は考えている。彼の仕事においては常に二人が権威をもって語っている。

広く根付いている古典的伝統の現在の状況は、逆転移分析の位置付け、機能そして限界について学派の内外で議論が続いているというものである。分析家の逆転移の使用につい

での Jacob (1993) 独自の理論的な仕事は対象関係論、現代フロイト派 (Sandler 1976)、自己心理学に由来している。Jacobs にとって逆転移はもっともはなやかで多様に配置された形態で現れ、転移と同様に (独自の) 豊かさと多くの問題を含んでいる。身体、こころ、空想、対人経験のすべてといった分析家が用いることのできるすべてが分析ワークには必要不可欠であると彼は論じている。今や逆転移は分析家の仕事にとっての問題ではなく、解決 (の一部) であり、必要不可欠なものである。Jacob の分析的・主観性の使用には、すべての分析カップルの経験を支え連絡する一元的、意識的、前意識的、無意識的で微妙で広範なコミュニケーションに関する想定が組み入れられている。意味生成が豊かに共構築されるには、分析家にはこれらの複雑なコミュニケーションにおける自分自身の部分について非常に深く探求し理解することが必要不可欠となる。Jacobs(1991,1999,2001)や Smith(1999,2000,2003)、そしてより対象関係論に近い分析家である Ogden(1994,1995)や Gabbard(1994)らとの間には相違があるにも関わらず、分析的なワークを最終的に進める自己分析には、分析家の主観性は欠かせないとしている。この思考の系列では、逆転移はエナクトメントの典型として考えられている。(Harris 2005; 別項の ENACTMENT を参照のこと。)

逆転移の反復的、強迫的側面について考えるとき、Smith(2000)は逆転移は分析的進展を遅らせることも促進することも (同時に起きることさえ) あるだろうと述べている。ここで Smith は Freud が転移について行ったことを逆転移について行っているのである。すなわち、抵抗にも変化の原動力にもなりうることを示しているのである。すべての反復強迫に関するように、健康への衝動も病気への衝動も同時に存在しているのである。

Apprey (1993,2010,2014) は、Sandler の逆転移に駆り立てられる役割応答性を拡張し、次のように述べている。「現在における臨床的設定という公けの場所で、歴史に根差した不満を繰り返すまたはひっくり返そうとする無意識的な願望により駆り立てられた転移 - 逆転移連続体の中で、嘆願、要求、喚起されるものすべてに言及する。」(Papiasvili にあてた私信、2014) 投影同一化、エナクトメント、役割応答性の複雑さを架橋する現代フロイト派である Apprey は、この概念の北アメリカにおける特徴的な現代の使い方および拡張について、役割に応答する分析家を患者自身のこころの内部から、患者に侵入し苦しめる「破壊的で圧制的な内的対象からの・・・心的な開放」を可能にするものとして描写している。

Freedman、Lasky や Webster (2009) は間主体的なマトリックスの内部での象徴化と三角化についてフロイト派、ラカン派、ウィニコット派の概念を複雑に組み合わせている。一方で、いわゆる普通の逆転移と異常な逆転移を区別している。普通の逆転移は一時的な混乱であり、異常な逆転移は行き詰まりであり、分析家にとって耐えられないもので分析家の意識から閉め出す必要があるものである。「欲望のレンズ」(Lacan,1977)を通してみられるものというラカン派の逆転移理論と「ほどよい分析プロセス」、「潜在力のあるブレイクダウン」というウィニコット派の枠組みがここで出会っている。

III.B. フィールド理論とそれに関連した視点

Ferenczi と Sullivan (1953、1964) によって臨床的に予見され、また対象関係論の進展に影響されながら、「フィールド」の概念は逆転移に関する議論に入りこんできた。Maurice Merleau-Ponty (1945) の現象学と Kurt Lewin (1947) のヨーロッパ - 北アメリカの新ゲシュタルト社会心理学的力動フィールド理論にルーツを持つ精神分析家（特に中南米とイタリアの、そしていくぶん少なくなるがアメリカの）は、この視点を生かして、状況のすべての側面がすべての他者と密接なかかわりあいをもつという統合された全体として分析設定もしくは分析状況を理解した。このシステムにおいて、逆転移は精神分析治療における入り組んだ体験 *web of experience* の避けられない側面である。逆転移のこうした考えの代表的存在はアルゼンチンの分析家である Willy Baranger と Madeleine Baranger である。設定によって範囲が定められてはいるが、ふたりが避けられない微妙な方法でお互いに相互作用し、展開し続けるふたりのフィールド *evolving bi-personal field* として彼らは分析的プロセスを描写する。精神分析プロセスは同じように転移と逆転移から始まる「共同で創造するもの *joint creation*」である。転移 - 逆転移が「要塞」(Baranger and Baranger 2008, 初出は 1961) を作り出す可能性を孕んだ力動的フィールドから生じるというこの考え方は、分析家と被分析者が行き詰まりおよび新たな創造にあることを意味している。フィールドの構造は「患者と分析家において異なる限界、機能、性質をもって作用する投影同一化、取り入れ同一化、逆同一化プロセスの相互作用によって構成されている」(同書、809p)。ブラジルの Roosevelt Cassorla (2013) は急性および慢性エナクトメントという現代的な概念を発展させた。それは分析ペア間の相互の行動的な発散として生じて、分析的フィールドに侵入するのだが、そのことは、言語の象徴機能が損なわれた状況への回帰を反映している。こうした最近の中南米の逆転移の考えは、Baranger 夫妻や Bleger (1967) の伝統や業績にルーツを持ち、Racker (1968) や Grinberg (1968) と相互に交わり合いながら、しばしばラカン派に影響を受けて (de Bernardi 2000, Cassorla 2013) 発展してきたものである。

分析的フィールド論はヨーロッパと北アメリカの両方でさらに発展してきた。アメリカの Stern (1997) は対人関係学派の視点からフィールド論を独自に洗練させてきた。ヨーロッパのフィールド論の代表格のひとりである Ferro はフィールド論とビオンの考えを融合してきた。Ferro と Basile の共同研究 (Ferro and Basile 2008) では、それぞれ固有の生き様をもつ患者と分析家の中の複数の人物がまるで舞台の上でのように出会う場所として今日フィールドは理解されている。彼らは分析セッションごとに現れる物語にフォーカスを特に置いている。彼らは逆転移の水準を区別している。「フィールドが示し、固有の緊張を調節するために利用する様式に区別は基づいている (Ferro and Basile 2008, p.3)。」セッションの中で語られる人物たちの変形は分析的フィールドの変形を表すものと見なされる。

そのような結びつきを探求していくことは、(患者の) 投影同一化と (分析家の) もの思いとの間の「チャンネル」の開閉について明らかにする (同書、p.3)。Ferro (2009) と Civitarese (Civitarese 2008, Ferro and Civitarese 2013) は、患者自身および分析家と被分析者の間にある無意識のプロセスのガイドとして分析家のこころと体を用いること、もの思いを保つことを強調している。

この視点はイギリスで訓練を受けた北アメリカの分析家である Thomas Ogden の共に創造された相互作用という概念と多くの点で共通している。そこにはクライン派の影響も見取れる。Ogden によると、転移や逆転移が精神内界のものであるという考えは、転移逆転移マトリックスの間主体的な見方によって補完されるべきであるだけでなく、こうした視点は、部分の合計以上の何かを含み (フィールドと類似している)、新たな進化する主体性である (間主体的) 分析の第三主体 *analytic third* へと弁証法的に導くように構成するものであると見なされるべきである。

同じく、精神内界のものであるという考えと間主体的な考えとをフランスの精神分析の枠組みで結び付けたのが Green (1973/1999、2002) である。Winnicott の可能性空間の研究に沿って、Green は第 3 のプロセスの領域における別のフォーメーションについて定義している。彼のバージョンでは「第三の対象」としての「分析対象」(分析の対象および分析の中の対象) である。それは分析家に属しているものでもなく、被分析者に属しているものでもなく、移行性を持ち、分析的な出会いの中で形成される。Green の考えでは、間主体的な関係は二つの精神内界的な主体を接続し、そして「分析カップルという二人のパートナーの内的世界が絡み合っはじめて間主体性が実体性を帯びるのである」(2000、p2)。

III. C. 二者心理学、精神相互的 Interpsychic および間主体的なものへのフォーカス：「共通点」としての逆転移

この 10 年の間、ヨーロッパ (特にイタリア) から独自に由来するもので、「精神相互性 interpsychic」(「間 - 主体性」とはまた別のもの) の概念化がより今日的なものとして世界的にみられるようになってきている。(Bolognini 2004、2010、2016) この最近の関心は、無意識の二つのシステムがより高次の形態である意識もしくは主観性の関与のないところで、お互いに直接的に影響しあっているというフロイトの見解に類似するものである (Freud 1915, 1937a, b.)。精神相互性 interpsychic の概念化を形成するにあたり、フィールド理論の変形性「フィールド調節」(Ferro, 2001)、ウィニコット学派の「移行性」、複雑な現象としての共感に関する研究 (Bolognini 2009) がとりわけ関連がある。Stefano Bolognini (2016) の最近の研究では、「正常の」コミュニケーションとしての投影同一化の使用を通じて二人

の人物が内面的な内容を交換できる機能的な前主観的水準として「精神相互性 *interpsychic*」はみなされている。(Bolognini 2016,p.110) 拡張された心的次元として、内面から経験される二人の心の相互的な影響をそれは反映している。専門的な使用においては、分析的な対話が精神相互的 *interpsychic* なものとして経験されるとき、「最初にコンテイングにおいて、次に象徴化において、新しくより特異的な効果」を得る。このことは多くの様々な現代の精神分析学派の中で洗練されてきている。そこにはネオクライニアン、ネオビオニアンも含まれる。彼らは精神相互性 *interpsychic* の研究において、投影同一化を受け取る準備性に重点を置いている (Steiner 2011, Pick 2015)。

この考えに関連するのは一連のフランスの間主体的な考えであり、謎めいたメッセージを介した無意識のコミュニケーションにフォーカスし、侵害されていない患者の空間に注目することで、患者の主体化、表象化、象徴機能の働きに、分析家の主体性や分析家の表象能力および象徴能力を付け加えるのである。逆転移の文脈では、Faimberg (1992、2005、2012、2013、2015) の *脱中心化された臨床的傾聴としての逆転移ポジション countertransference position of de-centered clinical listening* が一例としてあげられるかもしれない。これは *聞くことを聞くこと listening to listening* としても知られており、患者が聞いたことや言ったこと (逆もまた同じ) を分析家がいかにか聞くかを注意深くモニターすることからなり、患者の受容性や象徴表象の状態を理解するガイドとして多くの驚きに導く。Jaqueline Godfrind-Haber と Maurice Haber (2009) の *共有され行為化された経験 shared acted experience* という概念は、まだ言葉で象徴されていないが象徴的な能力を含んでいる体現された「行動のイメージ」*'image of action'* という精神相互的 *interpsychic* なものの一例を示している。可能性から現実化への、そして行動領域から思考領域への象徴的な飛躍は、分析家の逆転移による参加を通して成し遂げられる。同様に、Rene Roussillon(2009)の研究は患者の前言語的な歴史からの出来事—メッセージを患者の行動と身体がいかにか伝えているかを追跡している。転移—逆転移の水準での精神相互的 *interpsychic* な伝達は「心的生活」の一部にそれらなることを促進しうる。様々な角度から、Green(2000)、Aulagnier(2015)、de Mijolla-Mellor(2015/2016)らもまた分析的「*共同 - 再 - 構成*」*co-re-construction* や患者の早期トラウマの歴史化、解釈が意味を持つための象徴能力の回復に必要なものとして *無意識的コミュニケーションの精神相互性 interpsychic* および／もしくは *間主体的な流れ* に分析家がすぐれた調律をすることを強調している。

アメリカや世界の至る所で、乳幼児研究、システム論、自己心理学に背景をもつ分析家によって二者心理学 *two-person*、インターシステム論 *inter-systemic view* もまた使用されてきている。相互の情動調節や情動注入についての現代的乳幼児研究 (Tronick 2002) は、精神相互的 *interpsychic* な伝達に臨床的に焦点を当てることととりわけ関係があるかもしれない。成人での臨床研究にあてはめると、多くの著者 (Nahum 2013) は精神分析プロセ

スの暗黙のルールの共同創造について強調している。しかしながら、彼らは患者と分析家との出会いを促進し強調する一方で、転移と逆転移概念を軽視している。

多くの現代的な学派では、「逆転移」概念の明白な使用や直接話題にあげることは最近、少なくなっているかもしれないけれども、分析家のパーソナルな面での寄与からフォーカスが外れたわけではなく、むしろその反対である。患者と分析家の絡み合い *inter-twinning of patient and analyst* は今日の精神分析の主要な視点のひとつである。もし、歴史的な流れをより長く検証するならば、逆転移が精神分析的方法の重要な要素をもつようになっていくことは疑いがない。

さらに成長と知識の可能性を広げるものとしての逆転移について付け加えると、Gabbard(1995)は逆転移が異なる学派間の新たな共通点になっていると主張している。彼は、このことを投影同一化や逆転移のエナクトメントといった二つの鍵概念の発展によると考えている（投影同一化やエナクトメントのそれぞれの項目を参照のこと）。患者の内的世界に接近し、影響を及ぼす道具としての分析家の情緒的反応についての長く発展してきた歴史をたどってみると、最近の議論は、分析状況における逆転移の積極的で明確な使用を拡張するべきなのか、そしてもしそうするのだとしたらどのように拡張するか、といった問いを含んでいる。つまり、ある状況のもとで、患者自身の体験の理解を促進させるために逆転移を開示すべきかどうかといったものである（Renick 1999, Gediman 2011, Greenberg 2015）。しかしながら、この介入技法の有用性について差し当たり一致した見解はない。

IV. 結論

卓越した逆転移の夢である 1895 年の Freud の「イルマの注射の夢」から始まり、逆転移概念の発展は「精神分析の誕生」からその更なる発展を通じ、理論と実践、臨床での作業と概念化の不断の相互作用の良い例となっている。

初期には逆転移は、主に分析家の臨床的な有効性へのリスクとみなされたが、初期にはほのめかされるだけだった精神相互 *interspsychic* の過程の結果として逆転移を理解する「その他」の傾向は、1920 年代と 1930 年代の分析の議論の中で次第によりはっきりするようになり、逆転移の定義は徐々に広がった。

20 世紀の最後の 10 年と 21 世紀の初頭は、分析状況の二人の主役の精神の内 *in* だけではなく間 *between* で進む精神相互の現象と過程に焦点を当ててきたように思われる。しかしこのような焦点付けの中においても、前主観レベルでの交流、患者と分析家との絡み合った主観性、両者の関係、両者の間の心的なフィールドと交流の多様な経路—無意識の反応、

感情や情緒、言語、身体的特徴、行動などというように、優先される主題が大変異なっているのを認めることができる。逆転移は次第に治療の道具とみなされつつあるが、その可能性と落とし穴は、臨床的にも理論的にも分析家の大きな関心を引き続けている。

概念の発展を通じて現れた異なる意味を帯びた側面は、他のどのような概念に言及しているか、どのような概念的領域から現れたかによって以下のように整理することができる：心の局所論モデル（意識/無意識）に関する「逆転移」、心の構造論モデル（自我-理想/自我、自我、イド）に関する「逆転移」、特別な心的作用（抵抗、投影、投影性同一視、コンテイナー/コンテインド）に関する「逆転移」、分析過程の特定の側面（効果的な機能、情緒的な応答、共感）に関する「逆転移」、分析家の心の特徴/限界に関する「逆転移」、精神相互およびあるいは主体-相互の交流という転移-逆転移マトリックス、あるいは場に関する「逆転移」、である。

逆転移は、異なる伝統が、それを通して互いに接近することのできるようなトピックなのかもしれない。そしてそれは精神分析の共通基盤を作っているのである。古典的なフロイト派の背景を持つ著者たちは、不可避免的に分析家は患者によって影響を受けると考えるようになりつつある。対象関係論の伝統の中で仕事をする分析家たちは、逆転移を、患者の投影およびあるいは置き換えの結果（患者の無意識過程のみを映すような）というだけでなく、分析家の性向を反映しているとみなしはじめてもいる。

今日では精神分析の文化、理論や臨床の多様性の隔たりを超えて、分析家か患者かを問わず分析家の感情は影響されるということについて幅広い意見の一致が定着し始めており、このことは作業に取り掛かっている分析家の豊かで多面的、本質的で人間的な側面を立証している。

以下も参照のこと：

コンテインメント：コンテイナー - コンテインド

投影同一化（近日掲載予定）

エナクトメント

参考文献

- Abend, S.M. (1986) Countertransference, empathy, and the analytic ideal: The impact of life stresses on analytic capability. *Psychoanal. Q.* 55:563-575.
- Apprey, M. (1993) *Psychoanalytic Anthropology after Freud: Essays Marking the Fiftieth Anniversary of Freud's Death*: Edited by David H. Spain. New York: Psyche Press, 1992. Pp.332. *Int. J. Psycho-Anal.* 74: 1292-1295.
- Apprey, M. (2010) A Plea for Negotiation in the Public Space between Internal and External Fields of Reference. *Psychoanal. Q.* 79:241-251.
- Apprey, M. (2014) Personal communication with Eva D. Papiasvili.
- Arlow, J. (1997) Discussion Paper from the Panel "Countertransference, Self-Examination, and Interpretation", Amer. Psychoanal. Assoc. Conference, New York, December 1997.
- Alvarez, A. (1992) *Live Company*. London: Routledge.
- Aron, L. (1996) *The Meeting of Minds*. Hillsdale, NJ: The Analytic Press.
- Auchincloss, E. and Samberg, E. (2012) *Psychoanalytic Terms and Concepts*. New Haven: Yale University Press.
- Aulagnier, P. (1975/2001) *The Violence of Interpretation*. Philadelphia: Brunner-Routledge.
- Aulagnier, P. (2015) Birth of a Body, Origin of a History. *Int. J. Psycho-Anal.*, 96:1371-1401.
- Balint, M. (1935/1952) The Final Goal of Psychoanalytic Treatment. In: *Primary Love and Psychoanalytic Technique*. London: Hogarth Press. 森茂起、柘矢知子、中井久夫共訳 (2018) : 一次愛と精神分析技法. みすず書房, 東京
- Balint, A. and Balint, M. (1939) On Transference and Countertransference. *Int. J. Psychoanal.* 20: 223-230.
- Balint, M. (1949) Sándor Ferenczi, Obit 1933. *Int. J. Psycho-Anal.*, 30:215-219.
- Balint, M. (1950) Changing Therapeutical Aims and Techniques in Psychoanalysis. *Int. J. Psycho-Anal.* 31:117-124.
- Balint, M. (1966) Die technischen Experimente Sandor Ferenczis. *Psyche – Z Psychoanal.* 20: 904-925.

- Balint, M. (1979) *The Basic Fault: Therapeutic Aspects of Regression*. London/New York: Tavistock Publications. 中井久夫訳 (2017) : 新装版 治療論からみた退行—基底欠損の精神分析. 金剛出版, 東京
- Baranger, M. and Baranger, W. (2008) The Analytic Situation as a Dynamic Field. *Int. J. Psycho-Anal.*, 89:795-826. (orig. work 1961).
- Bion, W. (1959) Attacks on linking. In: *Second Thoughts*. New York: Aronson. 中川慎一郎訳、松木邦裕監訳 (2007) : 連結することへの攻撃. 再考 : 精神病の精神分析論. 金剛出版, 東京
- Bleger, J. (1967) Psychoanalysis of the Psycho-analytic Frame. *Int. J. Psycho-Anal.*, 48:511-51.
- Blum, H.P. (1991) Affect Theory And The Theory Of Technique. *J. Amer. Psychoanal. Assn.*, 39S: 265-289.
- Blum, H.P. (2008) Further Excavation of Seduction, Seduction Trauma, and the Seduction Theory. *Psychoanal. St. Child*, 63:254-269.
- Bollas, C. (1983) Expressive Use of the Countertransference: Notes to the patient from oneself. *Contemp. Psychoanal.*, 19: 1-33.
- Bolognini, S. (2004) Intrapsychic-Interpsychic. *Int. J. Psycho-Anal.*, 85:337-358.
- Bolognini, S. (2009) The Complex Nature of Psychoanalytic Empathy: A Theoretical and Clinical Exploration. *Fort Da*, 15:35-56.
- Bolognini, S. (2010) *Secret Passages: The Theory and Technique of Interpsychic Relations*. The New Library of Psychoanalysis. London: Karnac.
- Bolognini, S. (2016) The Interpsychic Dimension in the Psychoanalytic Interpretation. *Psychoanal. Inq.*, 36:102-111.
- Bonomi, C. (2015) *The Cut and the Building of Psychoanalysis*. Vol 1. New York: Routledge.
- Borensztein, C.L. (2014) *Diccionario de Psicoanálisis Argentino*. Buenos Aires: Asociación Psicoanalítica Argentina.
- Brierley, M. (1944) Notes on metapsychology as process theory. *Int. J. Psycho-Anal.*, 25:97-106.

Britton, R. (2004) Subjectivity, Objectivity, and Triangular Space. *Psychoanal Q.*, 73:47-61
古賀靖彦訳、松木邦裕監訳 (2016) : 新装版 信念と想像 : 精神分析のこころの探求。金剛出版, 東京

Bromberg, P. (1998) *Standing in the Spaces*. Hillsdale, NJ: The Analytic Press.

Casement, P. (1987) Between the Lines on Learning from the patient – Before and After. *British Journal of Psychotherapy*, 4:86-93.

Cassorla, R.M.C. (2013) When the Analyst becomes Stupid. An attempt to understand Enactment using Bion's Theory of Thinking. *Psychoanal.Q*: 323-360.

Civitaresse, G. (2008) Immersion vs. Interactivity and the Analytic Field. *Int. J Psych-Anal.*, 84: 279-298.

de Bernardi, B. (2000) Countertransference: A Latin-American view. *Int. J. Psycho-Anal.* 81:331-352.

de Mijolla-Mellor, S. (2015/2016) Maternal Intrusion: Its Roots and Consequences. Paper Presented at the International Conference Parent – Infant Disturbance: Theory and Therapy, Paris. November 13-14, 2015; *Intern. Forum Psychoanal.* (2016), in press.

Deutsch, H. (1926) *Okkulte Vorgänge während der Psychoanalyse, Imago*, vol. XII.

Etchegoyen Horacio (1986) *Los fundamentos de la técnica psicoanalítica*. Buenos Aires: Amorrortu Editores.

Eisler, I.M. (1920) *Zur Theorie der Gegenübertragung (Theories of Countertransference)*. Presentation to Vienna Psychoanalytic Society. Vienna/Prague: December 1920.

Ellman, C. S., Grand, S., Silvan, M., & Ellman, S. J. (Eds.). (1998) *The modern Freudians: Contemporary psychoanalytic technique*. Northvale, NJ: Jason Aronson.

Erikson, E.H. (1954) The dream specimen of psychoanalysis. *J. Amer. Psychanal. Assoc.* 2: 5-56.

Faimberg, H. (1992) The Countertransference Position and the Countertransference. *Int. J. Psycho-Anal.*, 73:541-546.

Faimberg, H. (2005) *The Telescoping of Generations: Listening to the Narcissistic Links Between Generations*. London and New York: Routledge.

Faimberg, H. (2012) José Bleger's Dialectical Thinking. *Int. J. Psycho-Anal*, 93:981-992.

Faimberg H. (2013) ‘ “Well, you better ask them”’: the Countertransference Position at the Crossroad’. Chap.3, In: Oelsner R., (Ed.): *Transference and Countertransference Today*. London and New York, Routledge, pp. 49-67.

Faimberg, H. (2015) Oral Communication (with Eva D. Papiasvili).

Feldman, M. (1993) Aspects of Reality, and the Focus of Interpretation. *Psychoanal. Inq*, 13, 274-295.

Fenichel, O. (1927) *Kurzes Lehrbuch der Psychoanalyse*. *Int. J. Psycho-Anal.* 8: 537-543.

Fenichel, O. (1933) Braatøy, Trygve: Die psychoanalytische Methode. Beitrag zu der methodologischen Problematik in der Psychologie. *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, 19:623-624.

Ferenczi, S. (1909/1980) Introjection and transference. In: Balint, M. (Ed.), *First Contributions to Psychoanalysis*, pp. 35-93). London: Karnac Books.

Ferenczi, S. (1927/1955) The problem of the termination of the analysis. In: Balint, M. (Ed.) *Final Contributions to the Problems and Methods of Psycho-Analysis*, pp.77-86. London: Hogarth Press. 森茂起、大塚紳一郎、長野真奈訳 (2007) : 精神分析への最後の貢献—フェレンツィ後期著作集—。岩崎学術出版社, 東京

Ferenczi, S. (1928/1955) The elasticity of psycho-analytic technique. In: Balint, M. (Ed.) *Final contributions to the problems and methods of psycho-analysis*, 87-101. London: Hogarth Press. 森茂起、大塚紳一郎、長野真奈訳 (2007) : 精神分析への最後の貢献—フェレンツィ後期著作集—。岩崎学術出版社, 東京

Ferenczi, S. (1932/1988) *The Clinical Diary of Sandor Ferenczi*. In: Dupont, J. (Ed.), Balint, M. and Jackson, N.Z., transl.(. Cambridge, MA: Harvard University Press. 森茂起訳 (2000) : 臨床日記。みすず書房, 東京

Ferro, A. (2001). *Contentant inadéquat et violence des émotions : Dinosaures et Tortues*. *Rev. Belg. Psychanal.*, 38:3-18.

Ferro, A. (2002) *Seeds of Illness and Seeds of Recovery. The Genesis of Suffering and the Role of Psychoanalysts*. London: Routledge/New Library.

Ferro, A. (ed.) (2009) *The Analytic Field. A Clinical Concept*. London: Karnac.

Ferro, A. and Basile, R. (2008) Countertransference and the characters of the psychoanalytic session. *The Scandinavian Psa. Review*, 31: 3-10.

Ferro, A. and Civitarese, G. (2013) The meaning and use of metaphor in analytic field theory. *Psychoanal. Inq.* 33: 190-209.

Freedman, N., Lasky, R. and Webster, J. (2009) The Ordinary and the Extraordinary Countertransference. *J. Amer. Psychoanal. Assoc.*, 57:303-331.

Freud, S. (1900) The Interpretation of Dreams. SE 4-5: 1-626. 新宮一成訳 (2007) : フロイト全集 4、5 夢解釈 I、II. 岩波書店, 東京

Freud, S. (1909/1974) Letter from Sigmund Freud to C. G. Jung, June 7, 1909. In: McGuire, W. (ed). *The Freud/Jung Letters: The Correspondence between Sigmund Freud and C. G. Jung.* Princeton, NJ: Princeton University Press 平田武晴訳 (1979) : フロイト/ユング往復書簡集 上. 誠信書房, 東京

Freud, S. (1910) The future prospects of psycho-analytic therapy. SE 11: 139-152. 高田玉樹訳 (2009) : 精神分析療法の将来の見通し. フロイト全集 11, 119-204. 岩波書店, 東京.

Freud, S. (1912) Recommendations to physicians practicing psycho-analysis. SE. 12: 109-120. 須藤訓任訳 (2009) : 精神分析治療に際して医師が注意すべきことども. フロイト全集 12, 247-258. 岩波書店, 東京.

Freud, S. (1915) Observations on Transference Love: Further Recommendations in the Technique of Psycho-Analysis. SE 12: 157-172. 道籙泰三訳 (2010) : 転移性恋愛についての見解. フロイト全集 13, 309-326. 岩波書店, 東京.

Freud, S. (1937a) Constructions in Analysis. SE 23: 255-269. 渡邊俊之訳 (2011) : 分析における構築. フロイト全集 21 341-357. 岩波書店, 東京.

Freud, S. (1937b) Analysis Terminable and Interminable. SE 23: 209-253. 渡邊俊之訳 (2011) : 終わりのある分析と終わりのない分析. フロイト全集 21, 241-294 岩波書店, 東京

Fromm-Reichmann, F. (1939) Transference Problems in Schizophrenics. *Psychoanal. Q.*, 8:412-426.

Furlong, A. (2014) Personal Communication with Eva Papiasvili.

Gabbard, G. O. (1982) The Exit Line: Heightened Transference-Countertransference Manifestations in the End of the Hour. *J. Amer. Psychoanal. Assoc.*, 30: 579-598.

Gabbard, G. O. (1994) Sexual Excitement and Countertransference Love in the Analyst.

- J. Amer. Psychoanal. Assoc., 42:1083-1106.
- Gabbard, G. O. (1995) Countertransference: the Emerging Common Ground. *Int. J. Psycho Anal.*, 76:475-485.
- Gediman, H.K. (2011) Cutting Edge Controversies. *Psychoanal. Rev.*, 98: 613-632.
- Green, A. (1974) Surface Analysis, Deep Analysis (The Role of the Preconscious in Psychoanalytical Technique). *Int. R. Psycho-Anal.*, 1:415-423.
- Green, A. (1973/1999) *The Fabric of Affect in the Psychoanalytic Discourse.* (Sheridan, A., Transl.). London: Routledge.
- Green, A. (2000) The Intrapsychic and Intersubjective in Psychoanalysis. *Psychoanal Q.*, 69:139.
- Green, A. (2002) The Crisis in Psychoanalytic Understanding. *Fort Da*, 8:58-71.
- Green, M.R. (1964) *Interpersonal Psychoanalysis: The Selected Papers of Clara M. Thompson.* New York: Basic Books.
- Greenberg, J. (2015) Therapeutic Action and the Analytic responsibility. *J. Amer. Psychoanal. Assoc.*, 63: 15-32.
- Grinberg, L. (1956) Sobre algunos problemas de la técnica psicoanalítica determinados por la identificación y contraidentificación proyectiva, *Revista de Psicoanálisis* 13: 507 - 511.
- Grinberg, L. (1968) On Acting out and its Role in the Psychoanalytic Process. *Int. J. Psycho Anal.*, 49:171-178.
- Grinberg, L. (1982) Los afectos en la contratransferencia. Mas allá de la contraidentificación proyectiva. XIV Congreso Latinoamericano de psicoanálisis. Fepal, Actas pp. 205-20
- Godfrind-Haber J. and Haber M. (2002) L'expérience agie partagée (Shared Acted Experience). *Revue française de psychanalyse*, 66: 1417-1460.
- Grotstein, J.S. (1994) Projective Identification and Countertransference: A Brief Commentary on their Relationship. *Contemp. Psychoanal.*, 30: 578-592.
- Hann-Kende, F. (1936) Zur Übertragung und Gegenübertragung in der Psychoanalyse (On the Transference and Counter-Transference in Psychoanalysis). *Internationale*

Zeitschrift für Psychoanalyse. 22: 478-496.

Harris, A. (2005) Rough Magic; Transference and Countertransference. In: Cooper, Gabbard and Person. Textbook of Psychoanalysis. Arlington, VA: American Psychiatric Publishing.

Heidegger, M. (1927/1962) Being and Time. (Engl. Transl. Macquarrie, J. and Robinson, E.), Oxford: Basil Blackwell. 細谷貞雄訳 (1994) : 存在と時間. ちくま学芸文庫, 東京

Heimann, P. (1950) On Counter-transference. Int. J. Psycho-Anal. 31: 81-84. 原田剛志訳・松木邦裕監訳 (2003) : 逆転移について, 対象関係論の基礎. 新曜社, 東京

Heimann, P. (1960) Countertransference. Brit. J. Med. Psychol., 33: 9-15.

Heimann, P. (1977) Further Observations on the Analyst's Cognitive Process. J. Amer. Psychoanal. Assn., 25:313-333.

Heimann, P. (1982) About Children and Children-no-longer. Collected Papers 1942-1980. London: Routledge.

Hoffman, I. (1998) Ritual and Spontaneity in the Psychoanalytic Process: A Dialectical Constructivist View. Hillsdale, NJ: The Analytic Press.

Jacobs, T. (1986) On Countertransference Enactments. J. Amer. Psychoanal. Assoc., 34: 289-307.

Jacobs, T. (1991) The Use of the Self: Countertransference and Communication in the Analytic Situation. Madison, CT: International Universities Press.

Jacobs, T. (1993) The inner experiences of the analyst: Their contribution to the analytic process. Int. J. Psychoanal. 74: 7-14.

Jacobs, T. (1999) Countertransference past and present: A review of the concept. Int. J. Psycho-Anal. 80: 575-594.

Jacobs, T. (2001) On Misreading and Misleading Patients: Some Reflections on Communications, Miscommunications and Countertransference Enactments. Int. J. Psycho Anal., 82: 653-669.

Joseph, B. (1985) Transference: The total situation. Int. J. Psycho-Anal., 66: 447-454. 小川豊昭訳 (2005) : 転移-全体状況として, 心的平衡と心的変化. 岩崎学術出版社, 東京.

Kernberg, O. F. (1965) Notes on Countertransference. J. Amer. Psychoanal. Assoc. 13:

38-56.

Kernberg, O.F. (1975) *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*. NY: Jason Aronson.

Kernberg, O.F. (1983) *Object Relations Theory and Character Analysis*. J. Amer. Psychoanal. Assn., 31S: 247-271.

Kernberg, O.F. (2015) *Neurobiological Correlates of Object Relations Theory: The Relationship between Neurobiological and Psychodynamic Development*. Int. Forum Psychoanal., 24: 38-46.

Klein, M. (1946) *Notes on some schizoid mechanisms*. Int. J. Psycho-Anal., 27:99-110.
小此木啓吾・岩崎徹也責任編訳 (1985) : 分裂的機制についての覚書. メラニー・クライン著作集 4 妄想的・分裂的世界. 誠信書房, 東京

Kohut, H. (1977) *The Restoration of the Self*. New York: International Universities Press.

Lacan, J. (1966/1977) *Ecrits, a Selection*. (transl. Sheridan, A.) London: Tavistock. 宮本忠雄、竹内迪也、高橋徹、佐々木孝次訳 (1972) : エクリ I. 佐々木孝次、三好暁光、早水洋太郎訳 (1977) : エクリ II. 佐々木孝次、海老原英彦、芦原脊訳 (1981) : エクリ III. 弘文堂, 東京.

Laplanche, J. (1997) *The Theory Of Seduction And The Problem Of The Other*. Int. J. Psycho Anal., 78:653-666.

Lasky, R. (2002) *Countertransference and the Analytic Instrument*. Psychoanal. Psychol., 19:65-94.

Lewin, K. (1947) *Frontiers in Group Dynamics: Concept, Method and Reality in Social Science; Social Equilibria and Social Change*. Human Relations, 1: 5-41.

Little, M. (1981) *Transference Neurosis and transference psychosis*. New York: Aronson.

Loewald, H.W. (1960) *On the Therapeutic Action of Psycho-Analysis*. Int. J. Psycho-Anal. 41:16-33.

Loewald, H.W. (1971) *The Transference Neurosis: Comments on the Concept and the Phenomenon*. J. Amer. Psychoanal. Assn., 19:54-66.

Loewald, H.W. (1975) *Psychoanalysis as Art and the Phantasy Character of the Psychoanalytic Situation*. J. Amer. Psychoanal. Assoc., 23, 277-299.

- López-Ballestros, L. (1923) Sigmund Freud: Obras completas, vol. IV. Madrid: Biblioteca Nueva.
- Mancia, M. (2006) Implicit Memory and Early Unrepressed Unconscious: Their Role in the Therapeutic Process: How the Neuroscience Can Contribute to Psychoanalysis. *Int. J. Psycho Anal.*, 87: 83-103.
- Mawson, C. (2010) *Bion Today*. London: Routledge. New Library of Psychoanalysis.
- Merleau-Ponty, M. (1945) *La Phenomenologie de la Perception*. Paris: N.R.F. Gallimard.
中島盛夫訳 (2015) :知覚の現象学<改装版>. 法政大学出版局, 東京
- Meltzer, D. (1973) *Sexual States of Mind*. London: Karnac. 古賀靖彦訳・松木邦裕監訳 (2012) : 心の性愛状態. 金剛出版, 東京
- Menninger, K. (1954) Regulatory Devices of the Ego Under Major Stress. *Int. J. Psycho-Anal.*, 35:412-420.
- Michels, R. (ed.) (2002) *Key Papers on Countertransference: IJP Education Section (IJP Key Papers Series)*. London: Karnac.
- Mitchell, S. (1993) *Hope and Dread in Psychoanalysis* New York: Basic Books. 横井公一・辻川昌登監訳 (2008) : 関係精神分析の視座-分析過程における希望と恐れ. ミネルヴァ書房, 京都.
- Mitrani, J.L. (1997) *Influence and Autonomy in Psychoanalysis*. Hillsdale, NJ: The Analytic Press.
- Mitrani, J.L. (2001) 'Taking the Transference': Some Technical Implications in three Papers by Bion. *Int. J. Psycho-Anal.*, 82: 1085-1104.
- Moscovitz, S. (2014) Hans Loewald's 'On the therapeutic action of psychoanalysis': Initial reception and later influence. *Psychoanal. Psychol.*, 31(4) 575-587.
- Ogden, T. H. (1994a) *Subjects of Analysis*. London: Karnac Books. 和田秀樹訳 (1996): あいだの空間—精神分析の第三主体. 新評論, 東京
- Ogden, T. H. (1994b) The analytic third: Working with intersubjective clinical facts. *Int. J. Psycho-Anal.*, 75:3-19.
- Ogden, T. H. (1995) Analyzing forms of aliveness and deadness of the transference countertransference. *Int. J. Psychoanal.* 76: 695-709.

- O'Shaughnessy, E. (1990) Can a Liar be a psychoanalyst. *Int. J. Psychoanal.* 71: 187-195.
- Papiasvili, E.D. (2014) Contemporary Relevance of Sandor Ferenczi's Concept of Identification with the Aggressor in the Diagnosis and Analytic Treatment of Chronic PTSD. *Psychoanal. Inq.*, 34: 122-134.
- Parat, C. (1995) *L'Experience Emotionnelle Partagée*. Paris: PUF.
- Pick, I.B. (2015) Irma Brenman Pick on 'Working through in the Countertransference' (IJP, 1985). PEP/UCL Top Authors Project, 1:1.
- Racker, H. (1948) *Contratransferencia: Las identificaciones complementarias y concordantes*. Presentación de la Sociedad Argentina de Psicoanálisis. Buenos Aires.
- Racker, H. (1953) A contribution to the problem of counter-transference. *Int. J. Psycho-Anal.* 34:313-324.
- Racker, H. (1957) The meanings and uses of countertransference. *Psychoanal.Q.*, 26:303-357.
- Racker, H. (1968) *Transference and Countertransference*. London: Hogarth Press. 坂口信貴訳 (1982): *転移と逆転移*. 岩崎学術出版社, 東京
- Reich, A. (1951) On Counter-Transference. *Int. J. Psycho-Anal.*, 32 25-31.
- Reisner, S. (2001) Freud and Developmental Theory. *Stud. Gend. Sex.*, 2:97-128.
- Renik, O. (1999) Playing One's Cards Face Up in Analysis. An Approach to the Problem of Self-Disclosure. *Psychoanal. Q.*, 68: 521-553.
- Rosenfeld, H. (1962) Psychotherapy of the Psychoses. *Int. J. Psycho-Anal.* 43: 184-188.
- Rosenfeld, H. (1969) On the treatment of psychotic states by psychoanalysis: An Historical Approach. *Int. J Psychoanal.* 50: 615-631.
- Rosenfeld, H. (1987) *Impasse and Interpretation*. London: Tavistock Publications. 神田橋條治監訳 (2001): *治療の行き詰まりと解釈*. 誠信書房, 東京
- Roussillon, R. (2009) Corps et comportement: langage et messages. *Rev. Belg Psychanal.*,55:23-40.
- Sandler, J. (1976) Countertransference and role-responsiveness. *Intern. Review Psychonal.* 3:43 41:352-365.

- Sandler, J., Dare, C. & Holder, A. (1992, 2nd ed.) *The Patient and the Analyst. The Basis of the Psychoanalytic Process*. Revised and expanded by J. Sandler and A.U. Dreher. Madison, CT: International Universities Press [orig. 1971]. 藤山直樹、北山修監訳 (2008): 患者と分析者 第二版 - 精神分析の基礎知識. 精神書房, 東京
- Sapisochn, G. (2013) Second thoughts on agieren: Listening to the enacted. *Int. J Psycho Anal.*, 94:967.
- Skelton, R.M., ed. (2006) *The Edinburgh International Encyclopedia of Psychoanalysis*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Searles, H.F. (1959) Oedipal Love in the Counter-Transference. *Int. J. Psycho-Anal.*, 40:180-190.
- Searles, H.F. (1979) *Countertransference and Related Subjects*. New York: International Universities Press. 松本雅彦他訳 (1991): 逆転移 1. みすず書房, 東京 田原明夫他訳 (1995): 逆転移 2. みすず書房, 東京 横山博他訳 (1996): 逆転移 3. みすず書房, 東京
- Segal, H. (1983) Some clinical implications of Melanie Klein's work: Emergence from Narcissism. *Int. J. Psycho-Anal.* 64: 269-276.
- Segal, H. and Britton, R. (1981) Interpretation of Primitive Psychotic Processes: A Kleinian View. *Psychanal Inq.* 1: 267-277.
- Smith, H. (1999) Subjectivity and Objectivity in Analytic Listening. *J.Amer. Psychoanal. Assoc.* 47: 465-484.
- Smith, H. (2000) Countertransference, Conflictual Listening and the Analytic Object Relationship. *J. Amer.Psychoanal. Assoc.*, 48: 95-128.
- Smith, H. (2003) Analysis of Transference; A Psychoanalytic Perspective. *Int. J. Psycho-Anal.* 84: 1017-1042.
- Spillius, E. (1994) Developments in Kleinian Theory: Overview and Personal View. *Psychoanal. Inq.* 14: 324-364.
- Steiner, J. (1994) Patient-Centered and Analyst-Centered Interpretations: Some Implications of Containment and Countertransference. *Psychoanal. Inq.*, 14:406-422.
- Steiner, J. (2011) Helplessness and the Exercise of Power in the Analytic Session. *Int. J. Psycho-Anal.*, 92:135-147.
- Stern, A. (1917) Countertransference. Paper presentation, New York Psychoanalytic

Society Meeting, New York: March 27, 1917.

Stern, D. (1997), *Unformulated Experience*. Hillsdale, NJ: The Analytic Press. 一丸藤太郎 小松貴弘監訳 (2003): 精神分析における未構成の経験—解離から想像力へ. 精神書房, 東京

Stoltenhoff, H. (1926) *Kurzes Lehrbuch der Psychoanalyse*. Stuttgart: Ferdinand Enke.

Sullivan, H.S. (1953) *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. New York: Norton. 中井久夫, 宮崎隆吉, 高木敬三, 鑪幹八郎訳 (1990): 精神医学は対人関係論である. みすず書房, 東京

Sullivan, H.S. (1964) *The Fusions of Psychiatry and Social Science*. New York: Norton.

The Boston Change Process Study Group (2013) *Enactment and the Emergence of New Relational Organization*. *J.Amer.Psychoanal.Assoc.*, 61:727-749.

Tronick, E.Z. (2002) *A Model of Infant Mood States and Sandarian Affective Waves*. *Psychoanal. Dial.*, 12:73-99.

Weiss, E. (1925) *Über eine noch nicht beschriebene Phase der Entwicklung zur heterosexuellen Liebe*. *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, 11:429-443.

Winnicott, D.W. (1949) *Hate in the Counter-Transference*. *Int. J. Psycho-Anal.*, 30:69-74. 北山修監訳 (2005): 小児医学から精神分析へ—ウィニコット臨床論文集. 岩崎学術出版社, 東京

Winnicott, D.W. (1950) *Aggression in relation to emotional development*. In: *Collected Papers: Through Pediatrics to Psychoanalysis*. New York: Basic Books, 1958. 北山修監訳 (2005): 小児医学から精神分析へ—ウィニコット臨床論文集. 岩崎学術出版社, 東京

Winnicott, D.W. (1972) *Holding and Interpretation: Fragment of an Analysis*. New York: Grove Press, (1986 edition), pp. 1-186. 北山修監訳 (1989): 抱えることと解釈. 岩崎学術出版社, 東京

Winnicott, D.W. (1974) *Fear of Breakdown*. *Int. Rev. Psychoanal.*, 1: 103-107.

各地域の顧問と貢献者

ヨーロッパ : Maria Vittoria Costantini, Dr.ssa. med.; Anna Ursula Dreher, Dr. phil.; and Dipl. Psych. Henrik Enckell, MD, PhD

中南米 : Adrian Grinson, Dr. dipl. Psych.

北米 : Andrew Brook, D.Phil.; Adrienne Harris, PhD; Robert Oelsner, PhD; and Arnold Richards, MD

追加レビュー : Rosemary Balsam, MD and Allannah Furlong, PhD

地域間連携共同議長 : Eva D. Papiasvili, PhD, ABPP

国際精神分析学会地域間精神分析百科事典 (The IPA Inter-Regional Encyclopedic Dictionary of Psychoanalysis) は、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス CC-BY-NC-ND が付けられて出版許可されています。中核的権利は著者ら (IPA と IPA 会員寄稿者) にありますが、非営利的使用、全出典が IPA (この URL www.ipa.world/IPA/Encyclopedic_Dictionary の参照も含みます) にあること、模倣や編集やリミックスの形式でなく逐語的複製であること、などの条件で他者も素材を使用することができます。各用語についてはこちらをクリックしてください。

訳出 : 小林要二、南澤淳美、中村浩平 (訳)、吾妻壮 (監訳)